

今私は當て兄と共に働んだ旧部隊の然る所、放棄会所の跡の小屋の中で拾う煙草が林を両脇の音を外に聞かせるが、兄を憶ひながらとる。

昭和十六年所沢以来兄と共に生活した手はこりとめらなく腹に浮人では来るもの、筆は煙草として送る。

沖繩の戦いは苦しかったらうな、当時の兄の心持は如何と考へると何と云魂し旅が見つかからず、又何んかに苦しかったらうな、後に長くものも信じて従軍と護國の志と化した兄等の事を考へると俺は今生きて居るのやうらめしい。

田原と山岡あり、頭をあげると心から兄の軍隊の尖舎の一角が耳にかす人を見える。窓が又一枚を高く、互ははげ、所々に骨まで見える尖舎が、この風の音に運つて至る刺木の声か、暖かき来る、一敵と覆くやつた風向の音は兄の怒の声か。

目をつら山岡と共に居し日の兄の軍が遠く沖繩の天戦場の兄の姿に逢つて来る。戦況は日に日に不利となり、海に戦つて矢折れ、艦に戦つて墜つて、部下は一人二人三人と煙山其り、軍司令官は自決、死場所を探すと、軍、あ、この時の軍が、部下の手前平然とはあらうか、その時の兄は、志願の行本と戦況とを思ひ合せ、自決を思ふことの胸の痛みは一瞬過ぎて居る風情は入るや月がしにくつて来た。

七五

故 足立 睦男 中佐 ノ 靈 二 贈ル

思ひ出の記
妹 尾 見

兄とは、大に感激を感ぜられた。拾りて知り合つたのは所沢だった。俺は才三次学生、兄は才四次学生だった。そして皆海に行つた時は二通期位位の方が先だった。下等は一語もつた。隊員心の御座りな縁起よしのものだ。そして、俺は高丸を居らんよ、戦術の要諦の所、隊の兄に頼んで、師匠長次郎の要諦を見せて貰つて貰いたさものだ。

又兄の初陣下の時に、水野と共に、茶室館に押しかけて飲んだ。次に高丸をせよ、一大失敗だ、十七年の元旦、出動の列に共に乗車して、其終了直後に、やつと部隊に着いて、何ともはや竹さすの、ペツの事い事もあつた。又として、バ坂水が、オニ次が、前線に居て来た時は、泣きかたつた。そして、俺が在場を受けた時、兄の遺骸を、ハイカーで、前線に運んで、進行隊に乗せて来た。早く死なせよ。その他、旅亭、和風と、思ひ出の歌もある。

しかし、浅き頃の支那にして、隊員と兄とは今や世を違へて居る。時は昭和二十八年八月十五日、兄より約一ヶ月半、戦術の大要を授けられた。吾等は泣きに泣いた。しかし、大抵には、兄の遺骸を運ぶの事は、才三次と再運ぶことと仰せられたのだ。

旅亭と兄と共に泣きかたつた。そして、進行隊に力を出すには、運搬十萬心手だが、しかし兄の死

と正しい文を早く早く建設し皇國の前途を念じつゝ、笑つて先んぞ幾百才の光榮同僚の守衛
出来る日の早からん事を念じて止みません。
兄弟水取流の騎士は國民の真意を解せられ来たる春に美しく快かれん事を

思ひ出

井上 文天

此の拙き一文を

讀みて

故足立陸生兄の靈前と
その母上様と

衛彦彦の昔懐の前に捧ぐ。

「兄と大山とは村塾、毒入の鐘ひ得さい人生最期の贈答をきき得とする。このこと
とどきの寂寥があると共に親の夢さるるも、
「お前のために捧げを予」と大山ことは母に皮く分つて居る。然しその分りぬいて居
る「義理の世界」の奥底に尚且つ懐がびたい故郷の遠道「人情の世界」を託することには
可能である。

重威に吾が子と捧げし親の苦境の深さは大東亞戦火のどの真に響き渡されぬであらうか。
故郷の苦境と親はとは、たゞ親者と大山の母とを隔ちたるものではない。老弱のわがしい重
威の奥底に、ひそかに大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
重威に吾が子と捧げし親の苦境の深さは、大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。

あ、重威、そして重威の今日
「お前のために捧げを予」と大山ことは母に皮く分つて居る。然しその分りぬいて居
る「義理の世界」の奥底に尚且つ懐がびたい故郷の遠道「人情の世界」を託することには
可能である。

大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。
大山の死がひくも泣き止つて居るのである。

石油の空軍、
主力を遊ばす、深戦

その翌日、兄の居る中隊は死なれたる飛行場へ。戦場は、あらゆる状況の不明、寒暑、
恐怖、その他のお話れども種々に牙痛的に死重に下る事のみです。そして敵軍に全く
敗走した一小部隊、深戦の之中、兄は居残るや、いち早く大層を判断せられ、「斯く
すべし」との確信を具申され、その意思は容れられたのでした。
戦場は赤ける西陣は、常に明確なる大層の判断と之を動かす器用なる意志と実行力と
つてその處はひらひれ、勝利の使者に違ふことが出来るのです。
「ジヤンケル」の一隊を思する「アスヘルト」並、「ゴム」隊、実在する工兵の隊、こ
れ等する並、風運に戦場を兄の指揮する小部隊は「トラウツリ」の隊を後に引へ、
その途中、傷兵を乗せて急遽に急ぐ敵の自動車と路上をばつたりはら合せました。「す
は」に急めく、神軍、兄はさつと車外へ、そして苦悶の中に訴へる「吾々は置きさら
れた」との一吉に兄の直達は因いたのでした。「敵は置却せり」とピンと来た直達、全
く敵軍の外はありません。

前述、前述、部隊は「ムシ」川の岸へ、
直達、天に下すも製油所の断滅をうつして降々と流れる「ムシ」川、そしてその直達のみ
ハセ

中に敵引上げの最後の一艇を見い出したのです。大をばう機動のうなり、水煙り、風
々たる眼をみながら仁王立の兄、そしてその二三歩はなれた、よろめいた自動車のかざ
に敵突一名、兄の心中をよそよそし、兄の活躍に歌ひたものも果してなんであつたのでせう。
一敗残兵の姿をせうか、敵艦の旗幟であつたのでせうか、將又株立する製油所より土界へ
紅蓮の旗であつたのでせうか。

否、兄の五体は毎々と直つたものは更に前部の運命であつたらうと、名匠の手によつて
成れる一面の名画を見る様な感激をもつて、人懐く立上りて兄は兄のたのしみで
戦場の直達で消えて平和期に。
そして戦後日。

兄弟入り後、物質の調査に、各方面との交渉に、戦後直後の繁華を東京の甲に常に
兄弟の姿が現れ出ました。
身震する天分、豊富なる知識、切論は兄の研究所より得られた暗みでしたが、彼は毎
んでも出まらな。又自然な仕事と解決するにまつて幾くはならぬ人として常に部隊を動
かす大きな力だつたのです。兄の兄のこの天賦は調査と運送との中に技巧と技巧のこえ
を更せるのをした。
この所の兄は一中隊の先任所長ではなく、いつの間にか、敵がするともなく、部隊の定
立があり、本を運送せむは兄の天賦は用立てはもちろなかつた。

是れは存履の体なすの無情のほげしきのみを知る者たこつては、も成した者のもつた
な多岐返答なる天分は思ひに對するいかぬ「足立は交つた男だ」との感時を吐くもの
のである。

或る日、彼は足立の遊藝するすぶらしい自動車に、燈の出多き味行着へ。
東京の自動車事故、支那での紛争、この自慢はわてのから聞いて居りましたか、足立の性
をこの危険な高、命に別途なれぬと内かちや、この事でした。昨日戦場、途はよし
車はとびきり、久しぶりの敵軍、足立のうなはうなつてゐるだらうと。

然るに僻なやに極めて求むる「ハンブル」もさき、危険な場所では遊藝、運成の
支那、むしろあつて居る秋の力をかきかゆい位でした。
若所大盛、得意の踊り、氣分別なことをやるやこの足立の故、入函の深さ、
自然と感下るものでした。

此の足立は、あり軍部加藤少将の会は水たのふした。後日、足立の腹に吹じたる軍部もあ
ちかげを感かました。彼等が手塚の持主の予が軍の備を知らぬことか必死のついで、
野原を工人の買心、足立の日常の不飲等でした。絶望の力、何れ生きた智識としてのもの
ですか、足立の多岐な天分の一つでした。

支那記は得意、支那も話せる。善いなる生かぶりして、少しも受けつりなかつたマレ
活か、は、たましき田圃風敷の中をこころいながら工人の顔を見、笑まざるのふし
八九

「ハ」市の郊外に、ヤのやからぬんじり、敵の遺骸を葬る工機廻り上は運こられた
「ハ」市の郊外に、ヤのやからぬんじり、敵の遺骸を葬る工機廻り上は運こられた
「ハ」市の郊外に、ヤのやからぬんじり、敵の遺骸を葬る工機廻り上は運こられた

足立は人面足立の墓ふかまの天下だった。
早急でも創意と工夫とによつて行れる戦況は、足立の快心の矢かも、其の類には大
胆な、勇気も、生活そのものすべてが前線に、今と運動して居た。準備は重要と
完成し戦況は好した。然し精巧な機械は、この小柄い体には却て重荷には常に不なる故
酒が好んで居た。そしてこの危険は、究極現象となつた。道を測して故たるも、
の故が知れたのかした。

足立は人面足立の墓ふかまの天下だった。
早急でも創意と工夫とによつて行れる戦況は、足立の快心の矢かも、其の類には大
胆な、勇気も、生活そのものすべてが前線に、今と運動して居た。準備は重要と
完成し戦況は好した。然し精巧な機械は、この小柄い体には却て重荷には常に不なる故
酒が好んで居た。そしてこの危険は、究極現象となつた。道を測して故たるも、
の故が知れたのかした。

作戦中止

志願は皆の胸をかきさした。そればかりではない。熟練者の態度がいつの間にかし
のびよつてゐた。然しそれぞの運命のいたすらに過ぎなかつた。
やがて戦場にも平和がふるとすれた。

戻つた料理は兄の手のもの。妻妾会、遊園会、遠足、子娘達の隊長の笑顔が矢の毒の
の中にあつた。そして忘れぬことの出ぬ想ひ出が昔の胸の中を刺まれば行つた。

一、戦場、川原

晴麗な朝のしほりの手。薪火へ。寒風を響く薪火の響を聞く。薪火が燃いた。
冬は去り、やがて春がふるとすれた。そして再び川原へ。兄は隊長になつた。

新しい隊長のまごを訓練隊は初つた。
「訓練隊は実行力だ、然る、大層はいらし。やもんだ、又訓練隊を」「自年次を懐ふは一
日であり、その一日に暮れるのだ」「訓練、訓練、訓練隊を「主業」之が陣頭に立つる
の命令であり、口でせざり、又中隊の性格であつた。「足立の中隊はよく動く」「足
立の中隊は訓練隊」とさし。どうぞ、足立式。

中隊長の意気の中隊の血のこぼる訓練隊とよつて遊られつ、あつたのぞす。飯所もあら
う。心が土々として置く。

一、訓練隊を

「百五年来の歴史は突一日にあり、その一日は遂に来たのだ」と

此の訓練隊は、我が長年の歴史を一新し、突の象徴を明らした。両方へ。突のこの
一歩を歩みしこの訓練隊は、どう報いられたいか。

訓練隊の訓練は、日々に進められ、漸次に、訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練
隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練
隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練隊は、訓練隊の歴史を、訓練隊の歴史と云ふこと、その訓練

けずれしは、何と可憐へ、悲愴を感ぜざるを得ず、悲しむつた正
月、雨夜に、然し此の平和をよに成すは、
突々として、
を打ち、
き、
謝罪は、
皇宮の、
兄の魂を、

高貴に、
亡逝す、
如何にして、
想ふ兄の、
目前の、
ところとは、
異國の、
くの人の、

如何にして勝つか、
想ふ兄の顔は、
目前の平和と、
ところとは、
異國の、
くの人の、

「他の努力は、
「兼ひら、
胸臆を、
表れを、

一、
義理、
断るべき、
るし、
として、
あつた、

通次三年、
この、
動す、
ある、
たので、
一つは、
の、

一つは、
の、

一、その心

偉大なる死のあとをうける私はあまりに小さかった。子を持つて知らぬ思、愛でる行をした。私はなく、私の心は兄への祈禱と敬慕の念にうごいた。然し軍隊はよくつて受水した。勿論兄の死に力ではあつたが、一日見て感さ度かつた。「賢者にもつとまるか」と言はれる様な気がしてなげめ死に。

任瀬急降の中に出て行かされた兄には如何なる運命が待つて居たか。既成先より更に最後の〇〇の部隊長に。

あゝ〇〇部隊。
そこには満ちた大の赤い時表、嵐の巻る波瀾のその、部隊が暴激に我が兄の道任を待ってゐた。

出動を風の便に願ひました。

私の兄への最後の便りは返さされ、空しく私の工に置かれ、無量の感傷に私の目かいらはいつしの流れ、やがて野陣の工にかすむ音を立てしなごんで行きました。私は兄の胸中を、兄の最後を推測したのでした。

運命

四月は夢の如く流れた。

臨陣、又玉洋、本工沢戦の戸は心あるもの、耳目を要した。可成り是工に表つた。

運命、沖空の斗雲は念々たるや運命の幕巻であつた。

あゝ運命、来るべき運命の日は遂に来たのだ。私は兄の最後は知りません。然し兄の心算は念々心算です。入陣の備置は何とやつたかの結果論をみる、悔ませんやと心算の備置の中をみる、悔ませんや。

あゝ、若日の壯歌

戦戦のその日、二十六年年の丁亥には、あはたゞしく魂鐘はなり夜り、暁ことばりかかきさるさ来た。

そしてその夜、運命たる運命の中に響く幾多の明星は唯一條の光芒と消して消えて行つた。

青山と動物

白雲自ら来らず

大工の中にも見えしする

何ものか、ありまするもの。

地を以ての事を置きて感さす。所詮は書けなかつた。只此を最も良く知つて下さる御家
に私の微意を述べて感さす。及、と思ひます。

昭和二十二年一月

故足立中佐略歴 (征進部隊関係)

昭和十六年十一月 征進部隊が四次轉戦として所沢西側第一一大部隊所次分隊漸入所
(当時中隊)

十二月 官廳原野場新田原西側第一一大部隊ニ移動。新田原ニ住ス
征進才ニ取替。捕虜サレテ三中队附才ニ取替。三中队附才ノ履門司ヨリ報告行取
アノンパンニ向フ。

アノンパン 到着。進今ニハレニバン 征進部隊参戦ノ履門司ニヨリ所部マ
レイニ向フ。

二月十五日 ハレニバン 征進部隊ニ才ニ次征進部隊トシテハレニバン 履門司ニ向フ

九八

今部下 進才ニ一團小隊ヲ以テハレニバン 官廳原野場ニ向フ

二月下旬 ハレニバン 征進部隊参戦ノ履門司ニ向フ。

三月上旬 アノンパン 到着

征進才ニ取替。進才五中队附才サレソノ中隊長トシテ進進才ニ取替ト

五月 大月 ラシヲ進進才ニ取替。天候不度ノ爲、若下中隊ヲハテ取替

六月下旬 所部所置ノ履ラングーニ出港門司ニ向フ。

七月下旬 門司上陸。官廳原野場ニ向フ。

八月 所部ノ履門司ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

第三中队隊長トナル

所部ノ履門司ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十一月 ニユーヤニマ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十二月一日 所部ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十二月 所部ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

昭和十八年四月

所部ノ履門司ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

七月下旬 所部ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十一月 ニユーヤニマ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十二月一日 所部ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

十二月 所部ニ取替。所部所置ノ履ラングーニ向フ。移動履門司ニ住ス。

